川崎医療福祉学会誌　Vol. 30　No. 1　2020　139－146

原　著

男子大学生のがんのイメージと子宮頸がんに対する意識調査

濵﨑祐実[*1]　塚原貴子[*2]

要　　約

本研究は男子大学生の子宮頸がんに対する意識を明らかにすることを目的とした．A 大学に在籍する男子大学生1,012名に無記名自記式質問紙調査を実施し，有効回答票307部，回収率39.0％だった．子宮頸がんを聞いたことが「ある」者は91.9％だった．HPV ウイルスに関する知識では6割以上の者が「知らない」と答えており，学年別でも有意差を認めなかった．子宮頸がんは男性も予防に関与できると思う者は79.5％だった．予防に関する情報では,「治療方法」「性行為における予防方法」「妊娠・出産への影響」に関心があった．がんのイメージと近親者のがん罹患者の有無との関連では「普通－特別」に有意差（$p<0.05$）を,「平気－怖い」「近い存在－遠い存在」に有意差（$p<0.01$）を認め，近親者にがん罹患者がいる者はがんのイメージを「普通」「平気」「近い存在」と捉えていた．がんのイメージと子宮頸がん予防への意識との関連では,「生きる－死ぬ」「平気－怖い」「近い存在－遠い存在」に有意差（$p<0.05$）を,「普通－特別」に有意差（$p<0.01$）を認め，予防に関与できると思う者はがんのイメージを「生きる」「普通」「平気」「近い存在」と捉えていた．HPV ウイルスが男性へ及ぼす影響や男性が媒介者となり女性へ感染させる危険性について教育する必要がある．子宮頸がんに対する予防意識を高めるために，正しい知識によってがんをポジティブなイメージで捉えることができる教育方法を検討することが課題である．

1．緒言

子宮頸がんの罹患年齢の変化を国立がん研究センターのデータでみると，罹患者が最も急増する年齢は1985年では50代～60代であったが，近年では，20代～30代に変化している[1)]．さらに，子宮頸がん罹患者数は年間約10,000人であり，約2,900人が死亡している[2)]．また，子宮頸がんは，妊娠・出産を考えている若い女性や幼い子どもをもつ母親へ影響を及ぼす疾患である．現在の日本の第1子出生時の母の平均年齢は30.7歳であり[3)]，子宮頸がん好発年齢と時期が被ることから出生率の低下に影響するため深刻な問題である．

このように子宮頸がんの若年化や罹患率・死亡率の増加に至った背景には，子宮頸がん予防が十分に行えていないことが原因の1つとして考えられる．子宮頸がんの予防方法には，1次予防である「HPV ワクチン」と2次予防である「子宮頸がん検診」がある．日本の子宮頸がん予防の現状として，HPV ワクチン実施率は1％未満であり，子宮頸がん検診は昭和57年から早期に実施されていたにも関わらず受診率が未だ20％程度と，どちらも低値である[2,4)]．子宮頸がんは性行為の経験がある女性ならば誰もが罹りうる疾患であるが，防ぐことが困難な疾患ではない．そのため，子宮頸がんを防ぐためにも女性一人ひとりがきちんと知識をもって予防行動に努める必要がある．また，子宮頸がんの原因は性行為による HPV ウイルスの感染であり，HPV ウイルスは男性の陰茎がん等の原因にもなるため男性も正しい知識を身に付ける必要があると考える．現在，男性のみを対象とした先行研究[5)]は少なく，男性の子宮頸がんに対する関心を明らかにした研究は行われていない．

＊1 川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　保健看護学専攻
＊2 川崎医療福祉大学　保健看護学部　保健看護学科
（連絡先）濵﨑祐実　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-mail : w5318101@kwmw.jp

そこで，本研究では男子大学生の子宮頸がんに対する意識を明らかにすることを目的とした．

２．方法

２．１　調査対象者

A 大学の1年生から4年生までの男子大学生1,012名を対象とした．

２．２　データ収集方法

各学科の学科長と必修科目担当教員に調査協力依頼書と口頭で説明し，承諾が得られた必修科目の講義終了後に研究者が研究について口頭で説明した．説明後に調査協力依頼書・調査票・調査票返信用封筒が同封してある封筒を男子大学生に配布した．回収は郵送にて行った．データ収集期間は2019年4月から2019年10月である．

２．３　調査内容

基本属性として学年・近親者（友人は除く）のがん罹患者の有無を質問した．

男子大学生の子宮頸がんの認識については，子宮頸がんという病気を聞いたことがあるか否か・子宮頸がんに関する知識の2つとした．子宮頸がんに関する知識では，子宮頸がんに関する先行研究[6-8]を基に「性行為による HPV ウイルスが原因」「20～30歳代の女性に多い」「女性の妊娠･出産に影響する」「早期発見によって生存率が上がる」「男性の陰茎がんなどの原因に HPV ウイルスが関係している」の5項目を挙げ，各項目に対して「知っている」「知らない」の二者択一とし質問した．

男子大学生の子宮頸がん予防への意識では，子宮頸がんは男性も予防に関与できると思うか・子宮頸がんに関する情報では何を知りたいかとした．子宮頸がん予防に関する情報として子宮頸がんに関する先行研究[7-9]をもとに，「HPV ワクチンの接種・検診の対象者」「HPV ワクチンを接種する女性の思い」「検診を受ける女性の思い」「HPV ウイルスによる男性のがん疾患」「検診・ワクチンの実施場所」「検診とワクチンの費用」「性行為で HPV ウイルスに感染しない・させないための方法」「治療方法」「発症･死亡率」「妊娠･出産への影響」の10項目とし,「知りたい」「知りたくない」の二者択一とし質問した．

がんのイメージでは，がんのイメージの先行研究[10,11]から「死」「恐怖」「身近にある病気」の3つを選択しそれらを基に「死ぬ」「普通」「怖い」「近い存在」の4つのイメージを新たに独自で作成した．さらに「生きる－死ぬ」「普通－特別」「平気－怖い」「近い存在－遠い存在」とし，対となるイメージを4項目作成した．左側に「生きる」「普通」「平気」「近い存在」を，右側に「死ぬ」「特別」「怖い」「遠い存在」を配置した．左から右へ1から7までの数字を振り SD 法にて測定した．これは，1に近いほどポジティブなイメージを7に近いほどネガティブなイメージを示す．

２．４　分析方法

統計解析ソフト（IBM SPSS Statistics ver.23）を用いて統計的処理を行った．学年と子宮頸がんに関する知識の関連では,「低学年群」と「高学年群」に分け，子宮頸がんに関する知識の5項目に対して「知っている群」と「知らない群」とし，関連を明らかとするために2×2のクロス集計による χ^2 検定を行った．

がんのイメージと近親者のがん罹患者の有無，男子大学生の子宮頸がん予防への意識との関連について t 検定を用いて検討した．有意水準は5％未満とした．

２．５　倫理的配慮

調査票の配布前に, プライバシーの保護について，調査票の受け取りと回答は自由意志であること，協力しないことで不利益を被ることはないことを口頭と調査協力依頼書にて説明した．また，調査票の同意欄にチェックが記入してあることで同意を得たと判断することや，投函後に同意撤回はできないことも同様に説明した．なお，本研究は川崎医療福祉大学の倫理委員会にて審査を受け，承認後（承認番号18－119）調査を実施した．

３．結果

３．１　対象者の基本属性

A 大学に在籍する1年生から4年生の男子大学生1,012名に調査票を配布し，回収数は395部（回収率39.0%）であった．395部のうち同意欄にチェックの記入がなかった61部と，無回答の4部，無回答欄の多い23部を除いた307部を有効回答票とした．307部の一部に無回答による欠損値がみられたが，回収標本が少ないことから分析ごとにペアワイズによって除去し，すべてを有効回答票として分析した．学年では,「1年生」56名（18.2%）,「2年生」77名（25.1%）,「3年生」87名（28.3%）,「4年生」87名（28.3%）であった．近親者のがん罹患者の有無では，近親者にがん罹患者が「いる」者が307名中167名（54.4%）であり，「いない」者が139名（45.3%）であった（表1）．

３．２　男子大学生の子宮頸がんに対する認識について

３．２．１　子宮頸がんを聞いたことがあるか否か

子宮頸がんを聞いたことがあるか否かを調査した結果,「ある」と答えた者が307名中282名（91.9%），「ない」と答えた者は25名（8.1%）であった．

表１　対象者の属性

学年	1年生	56　(18.2)
	2年生	77　(25.1)
	3年生	87　(28.3)
	4年生	87　(28.3)
近親者にがん罹患者の有無	いる	167 (54.4)
	いない	139 (45.3)
	n=307	人数（%）

表２　学年と子宮頸がんに対する知識の実態との関連

n=人数（%）

知識の質問項目	回答	全体（n＝307）n(%)	低学年(n=133) n(%)	高学年(n=174) n(%)	p値
性行為によるHPVウイルスが原因	知っている	102(33.2)	43(32.3)	59(33.9)	n.s.
	知らない	205(66.8)	90(67.7)	115(66.1)	
20～30歳代の女性に多い	知っている	142(46.3)	48(36.1)	94(54.0)	0.002**
	知らない	165(53.7)	85(63.9)	80(46.0)	
女性の妊娠・出産に影響する	知っている	229(74.6)	92(69.2)	137(78.7)	n.s.
	知らない	78(25.4)	41(30.8)	37(21.3)	
早期発見によって生存率が上がる	知っている	231(75.2)	89(66.9)	142(81.6)	0.003**
	知らない	76(24.8)	44(33.1)	32(18.4)	
男性の陰茎がんなどの原因にHPVウイルスが関係している	知っている	54(17.6)	22(16.5)	32(18.4)	n.s.
	知らない	253(82.4)	111(83.5)	142(81.6)	

注）検定方法はPearsonのχ^2検定による
n.s.＝有意差なし　＊＝p<0.05　＊＊=p<0.01

３．２．２　子宮頸がんの知識の実態

子宮頸がんの知識の実態を調査した結果，「早期発見によって生存率が上がる」について「知っている」者が307名中231名（75.2%），「知らない」者が76名（24.8％）であった．「女性の妊娠・出産に影響する」に対して「知っている」者が229名(74.6%)，「知らない」者が78名（25.4％），「20～30歳代の女性に多い」を「知っている」者は142名（46.3％），「知らない」者は165名（53.7％），「性行為によるHPVウイルスが原因」を「知っている」者が102名(33.2％）であり，「知らない」者が205名（66.8％），「男性の陰茎がんなどの原因にHPVウイルスが関係している」を「知っている」者が54名（17.6％），「知らない者」が253名（82.4%）であった．

３．２．３　学年と子宮頸がんに対する知識の実態との関連

学年と知識の実態との関連を調査した結果，分析対象者は307名であった．子宮頸がんに関する知識として示す5項目のうち「性行為によるHPVウイルスが原因」，「女性の妊娠・出産に影響する」，「男性の陰茎がんなどの原因にHPVウイルスが関係している」の3項目では低学年と高学年の学年別において有意差を認めなかった．「20～30歳代の女性に多い」，「早期発見によって生存率が上がる」の2項目では，高学年の方が「知っている」者が多く有意差（p<0.01）が認められた（表2）．

３．３　男子大学生の子宮頸がん予防について

３．３．１　男子大学生の子宮頸がん予防への意識

子宮頸がんは男性も予防に関与できると「思う」

表３　男子大学生の子宮頸がん予防に関する情報の関心

人数（%）

知りたい内容	n	知りたい	知りたくない
HPVワクチンの接種・検診の対象者	303	253(83.5)	50(16.5)
HPVワクチンを接種する女性の思い	305	237(77.7)	68(22.3)
検診を受ける女性の思い	305	242(79.3)	63(20.7)
発症・死亡率	299	273(91.3)	26(8.7)
HPVウイルスによる男性のがん疾患	298	270(90.6)	28(9.4)
治療方法	298	275(92.3)	23(7.7)
検診・ワクチンの実施場所	298	252(84.6)	46(15.4)
検診とワクチンの費用	298	265(88.9)	33(11.1)
性行為でHPVウイルスに感染しない・感染させない方法	298	274(91.9)	24(8.1)
妊娠・出産への影響	298	274(91.9)	24(8.1)

者が305名中244名（79.5%），「思わない」者が61名（19.9%）であった．

３．３．２　男子大学生の子宮頸がん予防に関する情報への関心

男子大学生の子宮頸がん予防に関する情報への関心について9割以上が「知りたい」と回答した4項目について以下に述べる．「治療方法」を「知りたい」者が298 名中275名（92.3%），「知りたくない」者が23名（7.7%）であった．「性行為で HPV ウイルスに感染しない・感染させないための方法」を「知りたい」者が298名中274名（91.9%），「知りたくない」者が24名(8.1%)であり同じく「妊娠･出産への影響」を「知りたい」者が298名中274名（91.9%），「知りたくない」者が24名（8.1%）であった．「発症・死亡率」を「知りたい」者が299名中273名（91.3%），「知りたくない」者が26名（8.7%）であった（表3）．

３．４　男子大学生のがんのイメージについて

３．４．１　男子大学生が抱くがんのイメージ

男子大学生が抱くがんのイメージを調査した結果，「生きる－死ぬ」のイメージの平均値と標準偏差は4.71±1.30 であった．「普通－特別」のイメージの平均値と標準偏差は3.81±1.59であった．「平気－怖い」の平均値と標準偏差は5.74±1.33であった．「近い存在－遠い存在」のイメージの平均値と標準偏差は3.37±1.47であった．特に「平気－怖い」のイメージにおいて「怖い」に偏る傾向がみられた（図1）．

３．４．２　がんのイメージと近親者のがん罹患者の有無との関連

がんのイメージと近親者のがん罹患者の有無との関連についてでは，分析対象者数が「生きる－死ぬ」では304名，他3項目は305名であった．「生きる－死ぬ」のイメージと近親者のがん罹患者の有無との関連について分析したが，差は認められなかった．「普通－特別」のイメージと近親者のがん罹患者の有無を検討し有意差（$p<0.05$）が認められ，近親者にがん罹患者がいる者の方が，がんのイメージを「普通」と捉えていた．「平気－怖い」「近い存在－遠い存在」のイメージでは，有意差（$p<0.01$）が認められ，近親者にがん罹患者がいる者の方が，がんのイメージを「平気」「近い存在」と捉えていた（表4）．

３．４．３　がんのイメージと男子大学生の子宮頸がん予防への意識との関連

がんのイメージと男子大学生の子宮頸がん予防へ

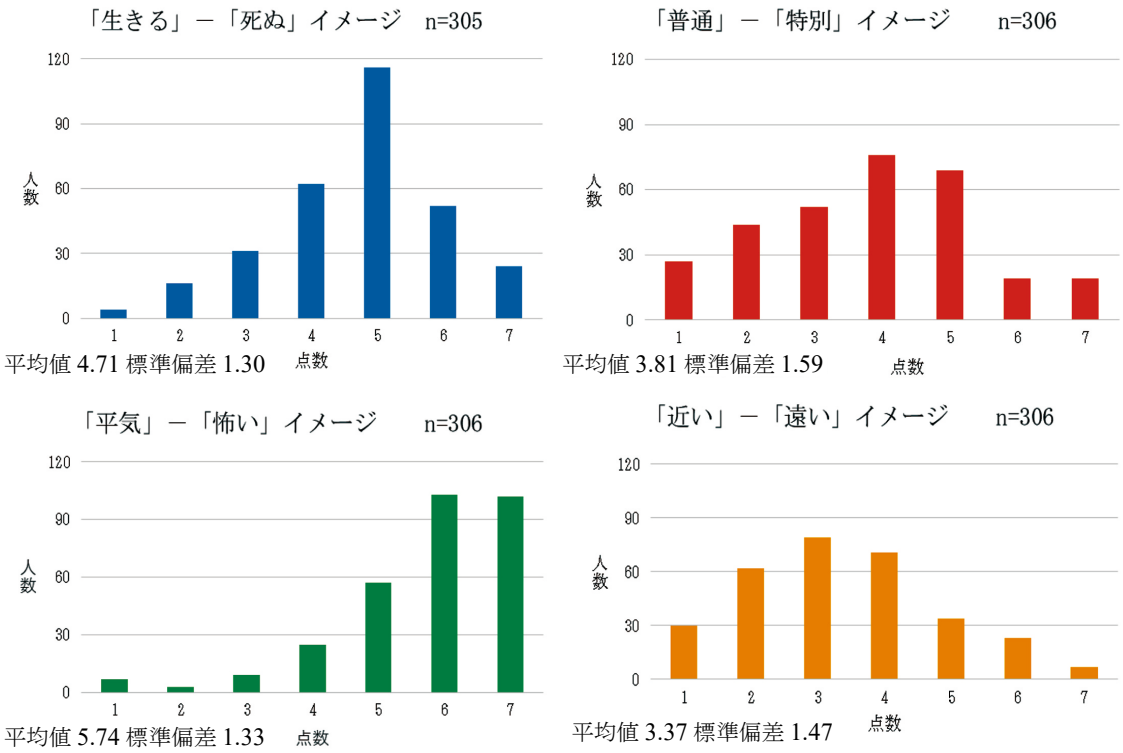

図１　男子大学生が抱くがんのイメージ

表４　がんのイメージと近親者のがん罹患者の有無との関連

n=人数（%）

がんのイメージ	いる n	いる 平均値	いる 標準偏差	いない n	いない 平均値	いない 標準偏差	t値	p
「生きる」－「死ぬ」	167	4.61	± 1.41	137	4.83	± 1.15	−1.50	n.s.
「普通」－「特別」	167	3.60	± 1.63	138	4.05	± 1.51	−2.48	0.013*
「平気」－「怖い」	167	5.56	± 1.39	138	5.95	± 1.23	−2.61	0.009**
「近い存在」－「遠い存在」	167	3.01	± 1.35	138	3.78	± 1.51	−4.65	0.000**

注）検定方法は t 検定による
n.s.=有意差なし　＊＝p＜0.05　＊＊=p<0.01

の意識との関連についてでは，分析対象者数が「生きる－死ぬ」では303名，他は304名であった．結果，「生きる－死ぬ」「平気－怖い」「近い存在－遠い存在」の3項目に有意差（p<0.05）が認められた．子宮頸がんは男性も予防に関与できると思う者の方が，がんのイメージを「生きる」「平気」「近い存在」と捉えていた．「普通－特別」のイメージでは有意差（p<0.01）が認められ，子宮頸がんは男性も予防に関与することができると思う者の方が，がんのイメージを「普通」と捉えていた（表5）．

４．考察

男子大学生の知識の実態では，学年別でみると，「20～30歳代の女性に多い」「早期発見によって生存率が上がる」において高学年の方が低学年よりも知っていると回答した者が多く有意差（p<0.01）が認められた．これらの結果から，高学年の方が低学年よりも子宮頸がんについて詳しく知っている理由は，学年が上がるほど専門的な教育を受けることが影響していると考えられる．しかし，「性行為による HPV ウイルスが原因」や「男性の陰茎がんなど

表５　がんのイメージと男子大学生の子宮頸がん予防への意識との関連

n=人数（%）

がんのイメージ	できると思う n	平均値	標準偏差	できないと思う n	平均値	標準偏差	t 値	p
「生きる」－「死ぬ」	242	4.63	± 1.29	61	5.01	± 1.31	-2.06	0.040*
「普通」－「特別」	243	3.64	± 1.52	61	4.49	± 1.70	-3.78	0.000**
「平気」－「怖い」	243	5.65	± 1.36	61	6.08	± 1.14	-2.50	0.014*
「近い存在」－「遠い存在」	243	3.28	± 1.43	61	3.73	± 1.63	-2.15	0.032*

注）検定方法は t 検定による　＊＝p<0.05　＊＊＝p<0.01

の原因に HPV ウイルスが関係している」を「知らない」と答えた者が学年を問わず6割以上であったことから男子大学生は，「HPV ウイルス」に関する知識が不足しており子宮頸がんの認知度が高いとは言えない状況である．HPV ウイルスの知識不足については豊住ら[12]の研究においても同様に述べられている．これらの現状から今後の予防教育として，HPV ウイルスが男性へ及ぼす影響や男性が媒介者となり女性へ感染させる危険性について教育し自己と関連付けることができるようにする必要性が考えられる．

男子大学生の子宮頸がん予防への意識では，約8割の男子大学生が男性も予防に関与できると考えていた．男性が「予防に関与できる」と思うことは，女性の予防行動にも良い影響を与えるのではないかと考える．田中と国府[7]は，女子大学生を対象とし，子宮頸がん検診に関する知識と思いに対して研究をしており，女子大学生は何らかのきっかけが与えられれば受診行動をとろうという意志をもっていたことや，きっかけとして有効なのは外部からの働きかけ，もしくは検診自体を身近に感じられることであることがうかがえると述べていた．また，角張ら[13]の研究では，パートナーからの推奨効果があることが推察されたと述べている．このため，男性も予防に関与していくことで女性の予防行動力が高まると推察される．カップル間で子宮頸がん検診，ワクチン接種について話すことができるように教育機関と専門職が連携して教育していく必要がある．

がんのイメージを男子大学生全体で見た際に，「平気－怖い」において「怖い」に偏る傾向が強かった．そのため，がんに対して「怖い」というイメージを持っている人が多いと推察する．だが，近親者にがん罹患者がいる者はがんのイメージを「普通」「平気」「近い存在」と捉え，予防に男性も関与できると思う者は，「生きる」「普通」「平気」「近い存在」と捉えていた．この結果から，近親者にがん罹患者がいる者や予防に男性も関与できると思う者は，がんに対する知識があることで，がんのイメージをポジティブに捉えていると推察する．よって，予防意識を高めるためには，がんをただ「怖い」疾患として捉えるのではなく，正しい知識から「必ずしも死ぬ疾患ではないこと」「予防や早期発見が大切であること」等，がんをポジティブなイメージで捉えることができる教育方法を検討することが課題だと考える．

５．結論

子宮頸がんを聞いたことが「ある」者は91.9％であったが，子宮頸がんに対する知識の実態では HPV ウイルスに関する知識が学年を問わず低かった．男性への影響や男性が媒介者となり女性へ感染させる危険性について教育し自己と関連付けることができるよう教育する必要性がある．

約8割の男子大学生が男性も予防に関与できると考えていたことから，カップル間で子宮頸がん検診やワクチン接種について話すことができるよう教育機関と専門職が連携して教育する必要がある．子宮頸がん予防に関する情報では9割以上の男子大学生が「治療方法」「性行為における予防方法」「妊娠・出産への影響」に関心があった．

男子大学生のがんのイメージは「怖い」に偏る傾向を示す一方で，近親者にがん罹患者がいる者は「普通」「平気」「近い存在」と捉え，予防に関与できると思う者はがんのイメージを「生きる」「普通」「平気」「近い存在」と捉えていた．以上のことから，子宮頸がんに対する予防意識を高めるために，正しい知識によってがんをポジティブなイメージで捉えることができる教育方法を検討することが課題である．

謝　辞

本研究は，多くの方々に御協力，ご指導いただくことで成し遂げることができました．調査を行うにあたりご多忙中にも関わらず調査に御協力下さった男子大学生の皆様，研究の趣旨を理解し御協力いただきました先生方に深く御礼申し上げます．

文　献

1）国立がん研究センターがん情報サービス：がん登録・統計 グラフデータベース．
http://gdb.ganjoho.jp/graph_db/gdb1?showData=&dataType=30&graphId=104&totalTarget=11&year=2015&years=1975&years=1985&years=1995&years=2005&years=2015&avgStep=&ageSybt=0&ageSt=009&ageEd=A85&currentAge=0&smTypes=17&smType=17&sexType=0&stage=0，2015．（2020.5.24確認）

2）公益社団法人日本産科婦人科学会：子宮頸がんと HPV ワクチンに関する最新の知識と正しい理解のために．
http://www.jsog.or.jp/public/knowledge/pdf/HPV_Q&A.pdf，2018．（2018.9.22確認）

3）厚生労働省：平成30年（2018）人口動態統計月報年計（概数）の概況．
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai18/dl/gaikyou30.pdf，2018．（2020.5.24確認）

4）厚生労働省：がん検診推進事業について 子宮頸がん検診について．
https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/gan10/pdf/gan_woman10_03h.pdf，2013．（2020.5.24確認）

5）石走知子，若松美貴代，有倉巳幸，田中祐子，松浦賢長，竹林桂子：大学生男子の子宮がん検診・子宮頸がん予防のワクチン接種についてのパートナーへの推奨に関する調査．思春期学，**33**(1)，124，2015.

6）亀崎明子，田中満由美，保田昌子，福田葉子：女子大学生の子宮頸がんに関する知識習得状況と予防行動の実態および関連要因の検討．母性衛生，**54**(2)，303-310，2013.

7）田中千春，国府浩子：若年者の子宮頸がん検診に関する知識と思い．日本がん看護学会誌，**26**(2)，35-44，2012.

8）大見広規，石川弘枝，高橋奈緒子，加藤千恵子，播本雅津子，舟根妃都美，結城佳子，メドウズ･マーチン，寺山和幸：大学生のヒトパピローマウイルスと子宮頸がん予防ワクチンについての認知度と態度. CAMPUS HEALTH, **48**(2)，163-168，2011.

9）滝川稚也：教職員に対する子宮頸がん予防ワクチンの意識調査の検討．現代産婦人科，**58**(2)，239-243，2009.

10）廣川恵子，大田直実：看護学生のがん，がん患者に対するイメージとその変化―がん看護学講義および実習前後のレポート内容の比較から―．川崎医療福祉学会誌，**27**(2)，325-336，2018.

11）渋谷えり子，平野裕子：がんサバイバーシップ概念を取り入れた講義の効果―がんのイメージ変化とがん看護への関心からの検討―．日本看護研究学会雑誌，**37**(3)，258，2014.

12）豊住春佳，吉澤あいり，橋本美幸，加藤江里子，加藤章子：大学生の子宮頸がんと HPV 感染に関する知識と認識の実態―男女差に注目して―．日本母子看護学会誌，**9**(1)，40，2015.

13）角張玲沙，田中佑典，上田豊，高田友美，八木麻未，中川慧，松崎慎哉，小林栄仁，吉野潔，木村正：子宮頸がんワクチン接種世代の20歳代女性の子宮頸がん検診に関する意識調査．日本婦人科腫瘍学会雑誌，**34**(3)，495，2016.

（令和2年7月25日受理）

Impression of Cancer and Awareness of Cervical Cancer among Male University Students

Yumi HAMASAKI and Takako TSUKAHARA

(Accepted Jul. 25, 2020)

Key words : cervical cancer, university student, male university student

Abstract

To clarify male university students' awareness of cervical cancer, an anonymous, self-administered questionnaire survey was conducted, involving 1,012 male students of a single university, and 307 valid responses were obtained (response rate: 39.0%). Students who had heard about cervical cancer accounted for 91.9%. More than 60% did not have knowledge of HPV (Human Papilloma Virus), revealing no significant differences among different school years, and 79.5% advocated males' contribution to cervical cancer prevention. Among various types of information regarding such prevention, they were interested in <methods of treatment>, <methods of prevention during sexual intercourse>, and <influences on pregnancy/childbirth>. On examining the relationship between the impression of cancer and its prevalence among relatives, there were significant differences in <normal - special> ($p<0.05$), <not scary - scary>, and <close - distant> ($p<0.01$ in both cases), as the tendency to associate cancer with the words <normal>, <not scary>, and <close> was more marked among students who had relatives with cancer. As for the relationship between the impression of cancer and awareness of cervical cancer prevention, there were significant differences in <live - die>, <not scary - scary>, <close - distant> ($p<0.05$ in all cases), and <normal - special> ($p<0.01$), as the tendency to associate cancer with the words <live>, <normal>, <not scary>, and <close> was more marked among students who advocated males' contribution to such prevention. Based on the results, it may be necessary to promote male students' understanding of the influences of HPV on males and their possibility of becoming vectors and infecting females through education. As a basis for enhancing their prevention awareness, effective educational approaches to create positive impressions of cancer based on accurate knowledge should be discussed as a future challenge.

Correspondence to : Yumi HAMASAKI

Master's Program in Nursing
Graduate School of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : w5318101@kwmw.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.30, No.1, 2020 139－146)